校長通信「若き息吹き」 No.25

【 自然災害の教訓と若い力（校長講話概要（10 月 20 日 避難訓練）） 】

令和5年 10 月 23 日

防災訓練は何のためにするのかというと、防災意識の向上と避難経路を体で覚えるということです。今日の皆さんの避難の様子は、とても落ち着いていて良かったと思います。小中を通して何度も避難訓練を経験したと思いますが大事なことはスピードより、冷静な判断と迅速な行動です。

さて、皆さんは災害を経験したことがあるでしょうか。私はこれまでに、平成7年（1995年）に阪神淡路大震災を経験しました。当時、淡路市の志筑に住んでいたのですが、震度7の揺れでタンスの下敷きになった経験があります。次に平成16年（2004年）には台風23号による三原川の氾濫による洪水にみまわれました。淡路島でも犠牲者が出るなど大きな被害が出ました。次に平成23年（2011年）には台風15号により志筑川が氾濫し、当時勤めていた津名高校では、体育祭を延期して全校生徒が志筑の町へ出てボランティア活動を行いました。「災間」という言葉があって、災害と災害の間を私たちは生きているという意味です。阪神淡路大震災や東日本大震災と今後必ず起こると言われている南海トラフ地震との間に生きているということです。

この地球上に住んでいる以上、自然災害は予測できませんし止めることもできません。また、人生100年時代と言われており、皆さんは今後70年～80年生きていくわけですから必ず災害に遭うという覚悟を持っておいて下さい。そのための防災教育です。

次に、災害が起こった後は、自分を守る「自助」、お互いに助け合う「共助」、国や県などの行政による市民への援助としての「公助」が重要です。さらに、避難所などが開設された場合には、縦・横・斜めの繋がりの「絆」のようなものが非常に重要となってきます。大人たちはこれから家族をどうやって守っていくか等を考え、必死になるあまりに争いやトラブルが起こり得ます。その際、皆さんのような若い人たちの協力が大きな力となります。この力は、高校時代に育んでいくのです。洲本実業での学びの全てが力を育んでいくことを胸に刻み、学びを続けて欲しいと思います。